平成21年度看護学部特別研究費実績報告

研　究　区　分：特別研究（個人）
研　究　課　題：Ⅱ型糖尿病患者の食行動に関する相互作用
―他者からの相互作用的影響の分析と記述―
共同研究組織：
代　表　者　肥後恵美子（看護学部　助教／地域看護学）
研　究　経　費：150,000円
研究実績の概要：

1．研究の目的・概要

1）研究目的

近年、Ⅱ型糖尿病患者は増加傾向にあり、地域ではその予防のために様々な取り組みが行われている。しかし、糖尿病予備軍と、糖尿病患者の増加は未だ減少傾向に移行していない。また、Ⅱ型糖尿病患者の自己管理行動の継続の困難性は現存する問題であり、行動変容に至らない患者は少なくない。

このような状況をふまえて研究者は前回の研究において、地域で生活しているⅡ型糖尿病患者の食べることの意味を捉えるために、その語りを記述した。その結果、食べることの意味は、ある一つのライフストーリーによって抑制的な方向性を帯びていると共に、様々なライフストーリーによってその方向性が強化されていると解釈された。更に、それらの食べることのライフストーリーは、他者や客観的自己という人との何らかの関わりが影響していると考えられた。

現在、地域看護における保健指導では、食行動をはじめとした適切な生活習慣の獲得のために、生活習慣病予防教室などの集団教室の開催と終了後の同窓会などによる継続的な支援といった取り組みがなされている。また、個別健康教育では、生活習慣病予防のために個別指導による継続的な支援が展開されている。しかし、支援を受けた全ての対象が、日常での食行動を望ましい形に変容させ、その行動を継続しているわけではない。ここに健康教育の難しさがある。

そのため、行動変容を妨げている要因を明らかにするために様々な研究が行われ、多くの知見が得られている。しかしその一方で、食行動に影響を与える要因の一つである「他者」が、どのような影響を与えるのか、その関係性を記述した研究はみられていない。これらについて記述することで、地域で生活するⅡ型糖尿病患者、ひいては、生活習慣病予備軍と言われる集団への食行動変容のための支援における対人的アプローチの基礎的な知見のための示唆が得られると考える。そこで今回、Ⅱ型糖尿病患者を対象に、食行動における他者との相互作用的な影響について分析、記述することを目的に研究を実施した。

2）研究概要

⑴研究対象者：Ⅱ型糖尿病の診断を受け、食事管理をするよう医療従事者より指導を受けている者６名

⑵研究方法：
- データ収集：半構成面接法によるインタビューデータの収集
- 分析手法　：M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）の手法を主軸とした、帰納的記述的分析

⑶データ収集、及び分析の手順

以下に示す具体的手順により分析を進めた。

①リサーチクエスチョン（以下RQ）、及び用語の定義を以下とし、質問項目を構成しインタビューを実施した。

なお、研究協力者（以下協力者）の同意を得て、インタビュー内容をICレコードに録音した。

②逐語録を作成し、分析データとした。

③逐語録を数回通読し、全体の文脈を掴みメモに残した。

④キーワード、及びキーセンテンスを捉えながら更に数回通読した。

⑤文章の意味のまとまりに区切りをつけ、その中での見出しや、長いセンテンスへ抽象度を上げた名前をつけ、分析ワークシートを作成した。（概念の生成）

⑥⑤を参照しながら更に逐語録を通読し、各概念のまとまりを掴み、そのまとまりに名前をつけた。（サブカテゴリーの生成）

⑦更にサブカテゴリーをまとめ、名前をつけた。（カテゴリーの生成）

⑧以上を通して概念同士のつながりによるRQに則したモデルを構成した。

＜RQ＞

Ⅱ型糖尿病で食事管理が必要であると説明を受

けている人は、食行動についてどのような他者に、どのような影響を受けているのか？

＜言葉の定義＞

・食行動；患者本人が食べることについて最終的に自己決定、選択し、食物を摂取する一連の過程

・他者　；メタ的な立場の自己、及び自分以外の周囲の人々

2．研究成果

1）結　　果

食行動に影響を与える他者としては、「家族」「メタ的立場の自己」「近隣者」「医師」「養育者」が挙げられた。カテゴリーとしては、【死別した家族や別居する家族の存在】【気遣いを継続する家族】【一人暮らしを気遣う近隣者】【糖尿病の継続治療に関わる医師】【孤独感と他者とのつながり感を有する自己】【体調の変化と向き合う自己】【養育における食行動の体験を提供する養育者】の７個が抽出された。また、サブカテゴリーとして、【死別した家族や別居する家族の存在】には、＜料理作りの遂行と義務感＞＜料理作りの役割の消失＞＜家族の病気体験＞【気遣いを継続する家族】には、＜料理への肯定的評価＞＜家族員であることの再構築＞【孤独感と他者とのつながり感を有する自己】には、＜孤独感による食行動の狭まり＞＜料理することの価値の再構築＞【体調の変化と向き合う自己】には、＜身体的変化の実感＞＜糖尿病改善への実行＞【養育における食行動の体験を提供する養育者】には、＜母からの体験的教授＞＜養育期の手作り料理の継続的摂取＞がそれぞれ抽出され、サブカテゴリーは、合計11であった。更に、それぞれのカテゴリー、及びサブカテゴリーにまとめられた概念は合計35個であった。

2）考　　察

研究協力者の一定の食行動の継続には、他者からの＜料理への肯定的評価＞や他者への＜料理作りの遂行と義務感＞が影響していた。しかし、このような食行動は、習慣化し継続しているとはいえ、＜料理作りの役割の消失＞と＜孤独感による食行動の狭まり＞にあるように、影響を与え続ける他者を喪失した時、崩壊する危険性を含んでいると考えられた。そして、新たな食行動を生成する際には、＜料理することの価値の再構築＞にあるように、［自分のために料理することの価値］が再認識され、日常生活の中でその認識が構築され続けていた。また、新たな食行動が遂行され始め、継続される際に影響していた他者は、対象者の幼少の頃の経験による、【養育における食行動の体験を提供する養育者】であった。加えて、他者からの［肯定的評価］が、食行動の継続に影響していた時でも、実際に選択され遂行されていた食行動に影響していた他者は、【養育における食行動の体験を提供する養育者】であった。

人の行動の決定づけを説明した理論として、「規範理論」がある。これは、自己以外の他者との密接な相互作用により、他者との間に架空上の「第三の身体」が生成され、それを共通理解として保有することにより、行動を決定する「規範」が形成されるというものである。この「規範」は、行動の長期的継続を支持する。確かに、習慣化し継続している行動と異なる行動をとる場合は、一種の違和感を感じる。これは、「規範」の「作用圏」の外で行われた逸脱した行動が、異様な感覚で感じられることと類似しているものであろう。

以上から、一定の食行動の継続においても、「規範理論」は例外なく作用すると考えられる。食習慣の背後には、他者によって、「第三の身体」が生成され、行動の「規範」が形成されている可能性があると考えられるのである。そして、食行動において「第三の身体」が形成されるようなレベルの濃密な他者とのやり取りが可能となるのは、家族、養育者、配偶者といった、自己にとって最も身近な存在にある人々との日常的な生活の場であろう。本研究で、「養育者」の存在が、食行動に影響していた背景には、研究協力者の幼少期にこのような「規範」の形成のプロセスが、「養育者」との密接な関わりの中で行われていた可能性が示唆される。

その一方で、＜糖尿病改善への実行＞にあるように、自己との数年に及ぶ努力的なやり取りによって、［果物の摂取制限］を実行できるようになり、現在は当たり前のようにその制限を実行している語りがみられた。このことから、「第三の身体」の生成と、それによる一定の食行動における「規範」の形成は、「養育者」のような身近な存在の他者のみではなく、「メタ的な立場としての自己」と、ある食行動を遂行しようとしている「今ここにある自己」との密接なやり取りにおいても形成される可能性があると考えられた。

このように人の食行動を規範理論よって捉えた場合、それを健康教育への一つの知見として活用するためには、以下が考えられる。対象者のそれまでの食行動に対して変容を促した後に、変容した行動の継続を図るためには、「メタ的立場の自己」と、「今ここにある自己」との密接なやり取りが繰り返し行われ、その結果として、二者間に望ましいと考えられる食行動についての「第三の身体」が生成され、一定の食行動を選択し遂行する「規範」が形成されるような継続支援が必要であるということである。

以上のように考えると、現在の個別健康教育は、被支

援者が自ら目標を設定し、到達度を繰り返し確認する過程であることから、「第三の身体」を生成するための初期的段階であるといえるだろう。加えて、「規範」の形成によって、ある食行動の継続が支持されるようになるための保健医療従事者による支援は、「メタ的立場の自己」と「今ここにある自己」との間に、「第三の身体」が生成されるまで継続される必要があると考えられた。

（※【】はカテゴリー、＜＞はサブカテゴリー、[]は概念を示す。）

3．研究成果の発表

1）学会その他の学術雑誌への掲載

M-GTAの手法にて概念の精緻化を継続し、地域関連の学会誌に発表する予定である。